

死線を越えて

中支戦線従軍の記
ビルマ

鳥取県ビルマ会慰霊巡拝

キヤクピューの丘に建てた慰霊パゴダ（ビルマ・ラムレ島）

死線を越えて

小松正雄



死線を越えて

小松 正雄

死線を越えて

中支
ビルマ 戦線従軍の記

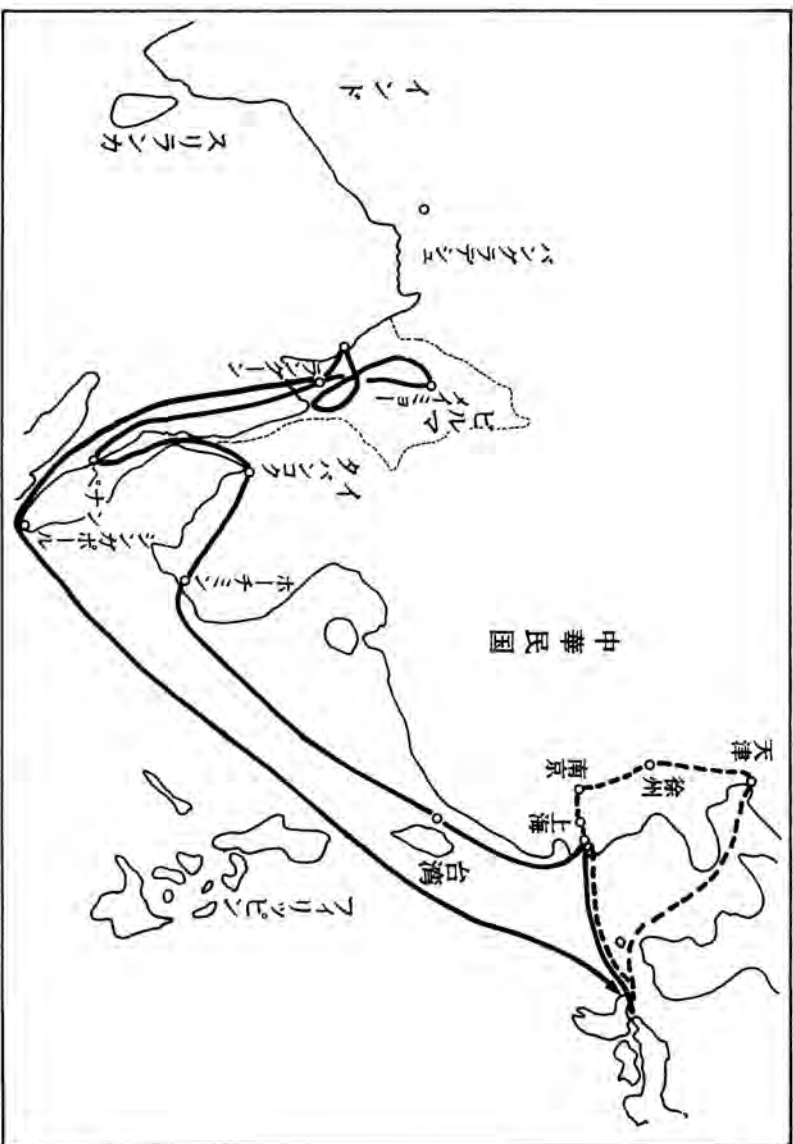
死線と越えて

小松正雄

中
支
マ
ビル
戦線従軍の記



陸軍少尉任官時



中支・ビルマ従軍中の行動図

はしがき

小松 正雄

戦後五十年を経た今日、ようやく私の青春時代の総てを傾け尽くして生き抜いた「軍隊時代」の記録づくりを思い立った。第二次大戦に参加して敗戦となり、やっと命永らえて帰還してから半世紀が過ぎようとしている。しかし、この間、戦争の体験を家庭の中で話題にのぼせたことはほとんどなかった。家族のお互いが日常生活に忙しく、そのような時代離れのした、全く異質の環境での出来事を話し出すきっかけも無かった。

しかし、軍隊復員以後の私の人生を貫いて、その行動の規範となり、私の生きざまの根幹となったこの体験を、余生も残り少なくなつた今記録に留めて、私の子や孫たちに「わが家の歴史の一ページ」として知っておいてもらいたいとの一念から、昔の断片的な記録を整理し、また忘れかけていた記憶も蘇よみがえらせて、一つの冊子にまとめた。

世間には、第二の人生という言葉がある。これは、若いころから体力や情熱の総てを傾け尽くして、会社や官庁の勤めに精励し、一応の地位や立場を得る。これを「第一の人生」とするのに対比して、その勤めを終わり、新しい人生を模索し、残された人生に処していくのを「第二の人生」という訳であろう。

この人生の区切り方からすれば、私にとって「第一の人生」とは、二十才から二十七才までの青春の七年間、心身の総てを燃焼し尽くして生き抜いてきた「軍隊生活」こそが、さしづめ、その第一の人生に相当する。そして、その後の三十余年間の教職およびその延長線上の、教育長職や日本赤十字社島根県支部への勤務が、第二の人生ということになる。平成三年春、七十歳にしてこれ等総ての勤めを終え、家庭に帰ってからの人生は、第三の人生といったところであらうか。

さて、私にとって、第一の人生即ち従軍体験は、人生七十年の総てを凝縮したものであった。自己を没却して、軍隊という特殊な社会組織に同化することを要求され、自らもそれに努め励んだ初年兵

時代、五十人の部下の尊い命を預かり、共に協力し共同して任務の達成に努力した小隊長時代、更には千人という規模の大隊長の補佐役として、苦難の大作戦に従事し、辛酸を嘗め尽くした大隊副官時代、この青春の七年間で、私の第一の人生としての区切りが終わった。

本書を執筆するに当たって特に戦闘の状況を忠実に表現したいと努めたが、何分四十数年の時間の経過は、細部にわたっては忘却のため、概念的な表現に終わった点も少なくない。本書をお読みいただく方にとって、戦争の具体的な認識と、戦争の愚かさについて少しでもお知りいただければ、望外の喜びである。

平成四年十月

も く じ

第一編 中支戦線従軍の記

一、支那事変の概要

二、師範学校入学

(1) 従兄の戦死

(2) 師範学校の生活

三、現役兵として入隊

(1) 徴兵検査

(2) 入隊

四、中支派遣

(1) 中支へ出発

(2) 初年兵教育

(3) 分哨勤務

(4) 分哨の炊事当番

(5) 幹部候補生受験

(6) 中支の春

五、北支へ移動

(1) 王楼分哨勤務

(2) 幹部候補生の教育隊

(3) 劉大庄付近の戦闘

六、豊橋陸軍教導学校・鳥取部隊

(1) 入学

(2) 教導学校の生活

(3) 大東亜戦の勃発

(4) 見習士官に任官

(5) 陸軍少尉に任官

第二編 ビルマ戦線従軍の記

一、大東亜戦の概要

二、ビルマ戦線の概要

(1) ビルマの地形氣候

三三

三一

三〇

二七

二四

二二

二〇

一六

一四

一三

三五

三七

三八

四〇

四三

四五

四六

四七

四九

五三

五八

(2) ビルマ戦線の概要

六〇

三、ビルマ到着まで

(1) 動員下令

六三

(2) 最後の手紙

六四

(3) 鳥取出発

六六

(4) ビルマ進駐

六八

四、西海岸の防衛

(1) サンドウエイ先遣

七二

(2) サンドウエイの守備

七五

(3) チェドバ島の守備

七七

(4) ラムレ島の守備

八一

(5) テード地区の守備

八三

五、戦闘開始

(1) ラムレ島に敵上陸

八八

(2) 遊撃隊長敵と組み討ち

九一

六、タンガップ地区の戦闘

(1) 大隊副官に就任

一〇二

(2) 第三大隊の戦闘概要

一〇三

(3) 副官としての戦闘（出陣）

一〇八

(4) 副官としての戦闘（遭遇戦）

一〇九

(5) 副官としての戦闘（防禦戦）

一一二

(6) タンガップ主陣地の戦闘

一一八

(7) 戦場における死生観

一一九

(8) 現地ビルマ人の協力

一二二

七、敵中突破の転進作戦

(1) 昭和二十年のビルマの戦況

一二四

(2) 敵中突破の邁作戦

一二六

八、混戦の邁第一期作戦

(1) 作戦の概要

一二九

(2) 転進への出発

一三二

(3) 戦は勢なり

一三三

(4) パウカンの戦闘

一三五

九、白骨街道の邁第二期作戰

(1) 第三大隊の転進

一三八

(2) 転進の苦渋

一四一

十、決死の邁第三期作戰

(1) 第三大隊の戦闘概要

一四六

(2) 故郷の夢

一五五

(3) 大隊長の負傷

一五七

(4) シッタンの渡河

一六三

(5) 大隊長の戦死

一六七

十一、極限の邁第四期作戰と敗戦

(1) 炭の粉を薬として

一七三

(2) 敗戦の報

一七七

(3) 体力の限界

一七九

(1) 武装解除と部隊再編成

一八三

(2) 冬瓜の味

一八四

(3) 体力の回復

一八六

(4) メイミョーキャンプ

一八八

二、復員

一九五

附記

○ 陸軍の兵制の概要と軍の組織

一、兵制の概要

二〇三

二、軍の編成

二〇五

○ ビルマ慰霊の旅

一、昭和四十六年慰霊の旅

二一一

二、平成二年慰霊パゴダ入魂式

二二七

第三編 抑留生活・復員

一、抑留生活